From the passive, to the active

青梅市郷土博物館再計画

三木良太

制作主旨

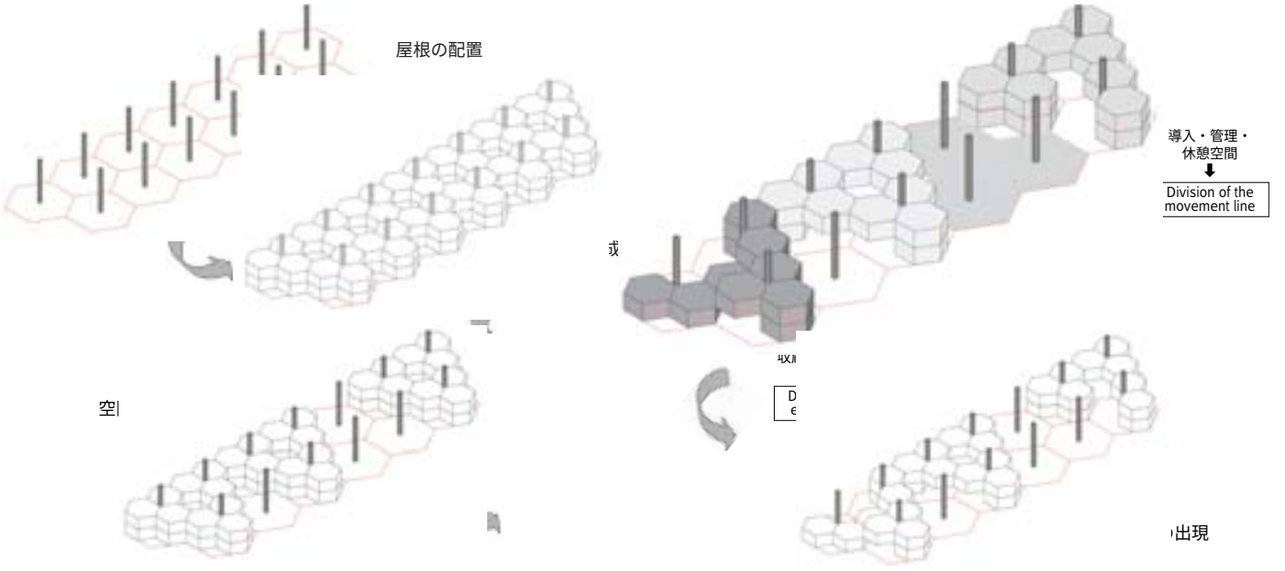
立地条件を十分に生かしきれていない建物は数多くあるであろう。青梅市釜の淵公園内に位置する青梅市郷土博物館は、前面を多摩川、背面に杉林を臨む恵まれた立地条件下にある。しかし、来館者を待つ受身とも捉えられる計画、展示空間の狭さなど、その好条件を生かしきれているとは思われない。この好条件を生かし、より開けた博物館の計画を提案し、公園内の活性化、地域の更なる活性化へ繋げようと考えた。

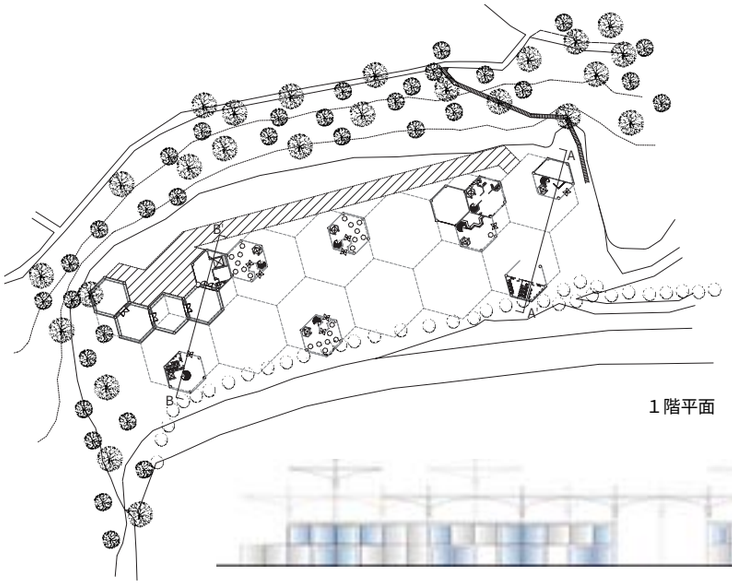
情報化社会の現在、そこにあるものを「体験」しに行くという位置付けで博物館の重要性は大きくなると考えられる。来館者は必要とする情報を得るべく、機能ごとに独立したユニットに直接アクセスし、管理も個別に行うことで自由度の高い空間の利用が可能となる。ユニット間の空間では、時に展示物を、時にイベントを体験でき、より厚みのある機能を有する博物館となる。計画的な与条件に加え、その敷地の好条件を生かすために、半屋内外空間を設ける。その屋根架構として、張弦樹木構造を使用した。周囲の景観に合ったその単独及び集合した形態。樹木及び郷土という言葉の人に与えるイメージ。展開が可能という施工性。一体感を持った増築が可能という増殖性。この屋根架構を用いることにより、魅力ある空間の創造が可能となった。

講師評：斎藤公男

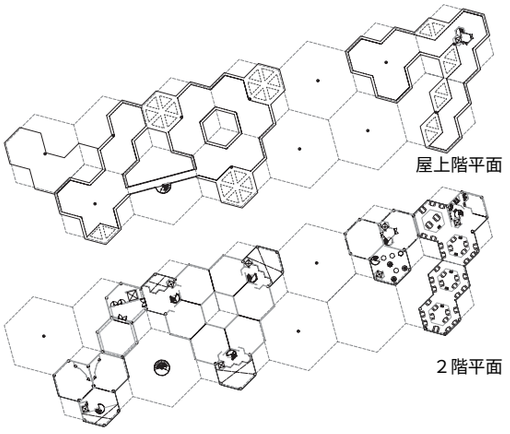
本提案は、景観・環境ともに恵まれた立地条件に建設されている郷土博物館の建て替え計画である。計画面では、既存の博物館のアプローチと異なる手法で、敷地の周囲環境に十分配慮した計画により新たな博物館の在り方を提案している。構造面では、提案した計画を実現するための構造としてユニット化したシステムを採用し、その活用法を提案している。提案されたユニット式張弦樹木構造は、施工性に優れるとともに集積により森のイメージを構築できることから、景観に配慮した全体デザインの実現を可能としている。また、内部機能ごとに独立にアクセスするという計画の実現にも、本ユニット・システムの独立性がその効果を十分発揮している。

計画・構造の双方からの検討の繰り返しにより、互いの利点を生かすような計画が行われていること及びユニットの独立性を考慮し将来の増殖性にも配慮している点は、非常に高く評価できる。今後、計画面では展示システムの提案や、構造面ではユニット・システムの構造的検討などを行うことにより、さらにリアリティーのある作品となることが期待される。





1階平面



屋上階平面

2階平面

東立面

イベント空間

エントランス部より

屋根部見上げ

ホルン型膜張弦樹木構造

全景